

Y04a ふれあい天文学 6年間の軌跡 - アンケート調査から見えてきたこと

藤田登起子、縣 秀彦、有本信雄（国立天文台）

全国の児童・生徒と天文学者が直接出会う機会があったら、様々な「化学反応」が起こるのでは？という発想で始まった国立天文台のアウトリーチ事業「ふれあい天文学」は、今年度で実施7年目を迎えた。2009年に世界各国で取り組まれた「世界天文年2009」の際に「天文学振興募金」が設立され、世界天文年以降その趣旨を継承し発展することを目的に、本事業は大学院支援室が発案し2010年度から開始された。2012年度からは天文情報センター普及室が担当。「ふれあい天文学」は募金を原資に、この間、北は北海道、南は鹿児島県、さらには父島、八丈島ほか全国各地約300校（延べ数）に出かけ、2010-15年度の6年間でふれあい天文学の授業を受けた児童・生徒の総数は、31,364名にのぼる。この間、全国の小・中学校で、個性あふれる工夫された授業が実施されてきた。本事業に参加した国立天文台職員は毎年40名前後である。

昨年度行った実施校アンケートによると、実施60校中47校より回答があり（回答率78%）、事業全体の満足度は5段階評定で平均4.8と極めて高い満足度であることが分かった。また、来年度も実施希望か？に対し同じく平均4.5と高い数値であった。ただ、募金を原資とする事業との認知は半数以下であった。講演においては本調査と出前授業を担当した国立天文台職員からの聞き取りから見えてきた本事業の評価と将来ビジョン、他大学・研究機関への波及効果について報告する。

ふれあい天文学 <http://prc.nao.ac.jp/delivery/fureai.html> 天文学振興募金 <http://www.nao.ac.jp/bokin/index.htm>